

Graded Readers で読み比べる『野生の呼び声』 —原作と縮約版のテキスト比較分析—

大縄 道子*

A Comparative Reading of *The Call of the Wild*: Textual Analysis of the Original and Graded Readers

Michiko OHNAWA

*Department of Human Culture, Faculty of Human Studies,
Ishinomaki Senshu University, Ishinomaki 986-8580, Japan*

1. はじめに

Graded Readers (以後 GR) とは、外国語学習者向けに語彙や文法、全体の長さなどを制限した段階別の読み物である。書き下ろし作品やノンフィクションもあるが、文学作品の古典や昔話をやさしく書き直した縮約版が多い。GR は英語授業のメインテキストや副読本として活用されることもあるが、特に多読活動において欠かせない存在である。各出版社がさまざまなシリーズを出しており、その種類や冊数は年々増えてきている⁽¹⁾。

GR のメリットは、レベルごとに難易度がコントロールされているため、学習者が自分の習熟度に合ったテキストを選び、困難を感じずに読書を楽しめることである。古典などの書き換えの場合には、有名な作品を(原書そのものではなくとも)英語で読めたという喜びや自信を得ることができる。また、英語圏の児童向けの絵本と異なり、大人も精神年齢に見合った内容を英語で楽しむことができるという点も利点として挙げられるだろう。

しかし GR には、根強い批判もある。Vincent (1986) は「あまりに多くの GR がうすっぺらく堅苦しいことばで書かれた原作の二番煎じであり、本物の文学を特徴づける言語的、感情的、美的な性質に一切欠けている」(212) と手厳しい。Richard Day (2015) は、批評家たちによる GR の批判を以下のようにまとめている。「文章がまずく、おもしろみがなく、読みにくく、…冗長性 (redundancy) や結束性 (cohesion) といった通常

のテキストの特徴に欠けている」(17)。

とはいえ、すべての GR が必然的に上記の特徴を持つというわけではない。Day and Richard (1998) は、実例を示しつつ、GR でも「インパクトと感情をともなって意思疎通することが可能」(75) だと主張しているし、ストーリーのおもしろさを何よりも重要し、読みやすく質が良い作品の追求のために、語彙や構文以外にも細心の配慮を払っていると述べる GR 編集者もいる (Bassett, 2015, pp.22-29)。Hill (1997, p.80) は9つのシリーズの各 GR を5点満点で評価し、同じシリーズ内であっても平易化 (simplification) の質にばらつきがあることを表で提示している。つまり GR にも当然ながら優れたものとそうでないものがあり、評価するためには個別的かつ具体的に検討する必要がある。

本研究ではジャック・ロンドンの『野生の呼び声』(Jack London, *The Call of the Wild*, 1903) とそれに基づいて書かれた3種類の GR を調査対象とする。簡略化の仕方や表現の選択は、作品の印象やわかりやすさの程度にどのような違いを生むのだろうか。オリジナルの作品と複数の GR の比較検討を通して、具体的に検証していきたい。

2. 先行研究

原作と GR を比較検討した先行研究には以下のようなものがある。Claridge (2005) は、エドガー・アラン・ポーの「黄金虫」とアーサー・コナン・ドイルの「まだらの紐」の一部をサンプルとして取り上げ、語彙の難易度、ディスコースマー

*石巻専修大学人間学部人間文化学科

表 1 調査対象の Graded Readers の概要

Graded Readers	PR	OBW	MMR	原作
総語数	9,280 語	10,965 語	15,867 語	31,805 語
headwords	600 語	1000 語	1400 語	
読みやすさレベル	YL2.4-2.6	YL 3.2-3.4	YL 3.4-3.6	
CEFR	A2~A2+	B1	A2~B1	
章の数	7 章	7 章	10 章	7 章

カー、冗長性、結束性といった言語の特徴と、情報や著者の意図などの内容面において、原作と GR との相違の程度を調査した。黛 (2007) は、オスカー・ワイルド著『カンタヴィルの亡霊』の 5 つの GR を比較し、それぞれの特徴を簡潔に紹介している。魚住 (2009) は、『フランケンシュタイン』の 3 種類の GR において原作の持ち味がいかにかに生かされ、また殺がれているかを、構成・人物描写・テンポの 3 つの観点から詳細に分析している。佐藤 (2012) は『ロビンソン・クルーソー』の GR5 種を、読者の多様な解釈を許容し「一定の文化リテラシー」を与えるような、物語の重要な構成要素を残しているかどうかという観点から評価した。魚住 (2015) は、「まだらの紐」を 5 種の GR と比較検討することによって、原作の語りの力と場面描写の豊かさを浮き彫りにした。Nii (2016) は、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』の 4 種の GR をプロット展開と人物描写の観点から比較し、それぞれの特徴を示した。

なお、黛 (2007)、魚住 (2009)、Nii (2016) はそれぞれ別の作品を分析しているが、共通して検討した 3 つのシリーズ (Oxford Bookworms、Penguin Readers、Macmillan Readers) について、同様の特徴を指摘している。すなわち、Oxford Bookworms 版は場面重視で生き生きした描写があり全体的な構成もよい、Penguin 版は原作の展開に忠実だが表面的な要約になりがちである、Macmillan 版は大胆な書き換えを採用している、というものである。

3. 研究対象と考察のポイント

3.1 研究対象

本研究では、アメリカの作家ジャック・ロンドンの代表作『野生の呼び声』を調査対象とする。温暖な地域で何不自由なく暮らしていた飼犬が

ゴールドラッシュの北方地域で樺犬となるこの物語は、まさに波乱万丈、手に汗握る展開で飽きさせない。ベストセラーならではのおもしろさがあると同時に、長らく高く評価されてきた古典でもある。また、中編のため大幅な内容の削除が不要なこと、プロットが時間軸に沿っている点などからも、GR に恰好の素材だと言える。現在少なくとも 10 種の GR が出版されている中から、総語数と読みやすさのレベルが比較的近いことから、ピアソン、オックスフォード、マクミランから出されている以下の 3 つの版を比較対象として選んだ。この 3 作は、最もメジャーな GR シリーズのもので、特に広く読まれている版でもあると考えられる。

- (1) Pearson English Active Readers⁽²⁾ (Level 2) 以下 PR
- (2) Oxford Bookworms (Stage 3) (以下 OBW)
- (3) Macmillan Readers (Level 4 : Pre-intermediate) (以下 MMR)

3 作の概要は表 1 のとおりである⁽³⁾。

3.2 考察のポイント

Day and Bamford (1998) は、「読みの流暢さと自信を身につけるためには、第二言語学習者はおもしろくて理解できる教材を読む必要がある」(53) と述べている。そこで本稿では、「わかりやすさ」と「おもしろさ」を GR に必要な要素として考えることとする。

「わかりやすさ」について

作品がわかりやすいということは、インプット仮説 (Krashen, 2003) から、学習者のモチベーションの観点からも、決定的に重要である。また、

「わからない」文章は「おもしろく」感じられることもない。GR はレベルごとに難易度がコントロールされているため、理解しやすそうであるが、実際はそう単純なことではない。縮約版は必然的に省略や単純化を伴うため、原作が有していた有機的なつながりが薄くなりがちである。Crossley (2017, pp.17-18) や Goodman and Freeman (1993, p.73,74) は、平易化されたテキストは接続表現や前後関係が省略されることが多く、文脈のヒントや結束性が少なくなるため、自然な文章よりかえってわかりにくくなると主張している。また不注意な平易化により、一貫性のなさや誤解を招く表現が生じてしまうこともありうる。どの部分を残し省略するのかという取捨選択、簡略化や補足には、細かい配慮が必要で、難しい判断が求められると言えよう。本稿ではテキストのわかりやすさに影響を及ぼすものとして、作品内の整合性の有無、説明不足な箇所、理解を助ける補足などに着目し、以下 4.1 と 4.5 で考察する。

「おもしろさ」について

優れた GR には物語自体の魅力が必要だというのは、多くの批評家や編集者たちの共通した意見である (Day & Bamford, 1998, p.76; Bassett, 2015, p.25; Hill, 1997, p.58; Claridge, 2012, p.117)。特に多読においては読書量が物を言うので、読書のモチベーションにつながる作品のおもしろさは非常に重要だ。『野生の呼び声』の場合、どの GR も基本的なプロットは原作を踏襲している。原作が持つ劇的な展開によってある程度おもしろさが確保される面はあるが、描写の仕方や表現の工夫などによって、一つ一つのシーンが与える印象やインパクトは大きく変わってくると考えられる。おもしろさの基準にはいろいろなものがありうるが、本稿では、作品の魅力につながる特徴でありつつ平易化によって失われがちな要素として、犬の視点、臨場感のある詳細な描写、予告によるサスペンスの効果に着目し、それぞれ 4.2、4.3、4.4 で考察を行なう。

4. 原作と GR の比較検討

4.1 赤いセーターの男と「棍棒と牙の掟」

本節では、小さな変更や省略が作品全体の整合

性やわかりやすさに影響を与える例として、物語の開始からほどなく、主人公である犬バックが「棍棒と牙の掟」を学ぶエピソードを取り上げる。

飼い主の家から盗まれたバックは、複数の人間の手を渡りつつ北へ北へと移動させられていた。生まれて初めて手荒で残酷な扱いを受け怒りを募らせたバックは、木箱から出された際に赤いセーターを着た男に何度も飛び掛かるが、その度に棍棒で激しく打ち据えられ、気を失う。棍棒を持っている人間には勝つことができないというバックの新たな気づきは、原作で非常に重要な出来事として強調されている。“He saw, once for all, that he stood no chance against a man with a club. He had learned the lesson, and in all his after life he never forgot it. That club was a revelation” (p.12). (棍棒を持った人間相手には勝てないということは、はっきり思い知った。もうこのことは学んだのであり、バックは生涯その教えを忘れなかった。棍棒はまさに啓示であった)。(4)

その後も他の犬たちが赤いセーターの男の支配を受け入れる様子を繰り返し目撃したバックは、この教訓をいよいよ深く胸に叩きこむ。“Again and again, as he looked at each brutal performance, the lesson was driven home to Buck: a man with a club was a lawgiver, a master to be obeyed, though not necessarily conciliated” (p.12). (何度も何度も、残忍なやり取りを見るたび、教えがまた新たに叩き込まれた。棍棒を持った人間は掟を定める者、服従すべき主人である。かならずしも追従する必要はないが)。この教訓は以後バックの指針となるもので、その後も作品内で節目節目に言及されることになる。

ではこのエピソードは各 GR においてどのように描出されているか、順に見ていきたい。まず PR では、赤いシャツ (sweater が shirt に変更されている) の男に何度も殴られたシーンは描かれているものの、バックが学んだ教訓に関しては、以下のような簡単な記述にとどまっている。“He learned a lesson that day. He learned the lesson of the club, and he never forgot it” (PR p.4). 困ったことに、ここでは教訓の具体的な内容が述べられていない。棍棒で殴られたシーンはあるものの、読者はこの記述のみでは、“the lesson of the

club”なるものがどのような教訓なのかかわからないだろう。バックの気づきの重要性も十分には伝えられていないし、赤いシャツの男が他の犬たちを慣らす場面を見たことへの言及もない。

原作では続く第二章の冒頭付近で、バックがたどり着いた北の地では、犬も人間も「棍棒と牙の掟 (the law of club and fang)」(p.15) 以外の掟を知らないと言われる。ここで PR は、“and fang”の部分を削除し、この掟を“the law of the club”(PR p.8)とだけししている。おそらく fang という単語が学習者にとって難しいために省くことにしたのだろう。ところが直後にストーリーは、「牙」の掟にあたる部分を示すために犬たちの残酷な行為の描写に移る。そのため PR では、“the law of the club”とはどのようなものなのかますます不明になってしまっている。

OBW ではバックの得た教訓を “He had learnt that a man with a club was stronger than him.” (p.6) と具体的に明らかにしている。また、他の犬たちが棍棒で打たれていることから “a man with a club must be obeyed” (OBW p.6) ということを理解したとの記述もある。しかしこれがバックにとって極めて重要な発見であったことは十分には強調されておらず、あまり伝わってこない。

OBW に関してこのシーンで特筆すべきことは、バックを棍棒で殴った男の呼称である。原作でも他の GR でも、この男は「赤いセーター (PR では赤いシャツ) の男」と呼ばれているが、OBW はこの男を “the fat man” (OBW p.4) としている。初回に “a fat man in a red coat” として登場した以降は、姿を消すまでの合計 10 回、一貫して “the fat man” と記述されている。赤という鮮やかな色はこの出来事の強烈さと合っており、視覚的にインパクトもあることから、バックにとっても読者にとっても記憶に残りやすい。それにもかかわらず OBW があえて異なる表現を用いたのは、おそらく “the fat man” という表現の方が “the man in a red coat” よりも構文的に単純で易しいためだと推測される。しかしながら、物語の中盤以降にバックがこの男を何度か思い出す際には、OBW でも “the man in a red coat” (p.24, 27) という表現が使われているのである。上述のように、この男が赤という色と結び付けられたのは初

出の際の一度のみであるため、数十ページ先で突然 “the man in a red coat” と書かれても、どの人間を指しているのか理解するのは容易なことではない。“the fat man” を選択したなら一貫してそうすべきであった。

上記の例からわかるのは、平易化のための小さな変更や省略も、当該シーンのみならず作品全体を十分に考慮して行わなければ、かえって混乱させる要因になりかねないということである。特に読者が学習者の場合、整合性のなさが原因で理解がややふやになった場合であっても、自分の英語力不足が原因だと考えてしまい、自信や意欲を失いやすい。学習者向けであるからこそ、細心の注意を払った平易化が望まれる。

MMR では、平易な英語で書かれつつも、バックの学びは原作のイメージに近い形で表現されている。

MMR He [Buck] now knew that he could not win a fight against a man with a club. He had learned that lesson, and he never forgot it. … the man in the red sweater became master of them all. As Buck watched, he learned the lesson again and again: a man with a club is a master and a law-maker, and you must do what he tells you. (pp.13-14)

また MMR では、棍棒を意味する “club” という単語の初出時に、本文の中で説明を加えて読者の理解を助けている。“The man … got an ax and a club—a heavy stick with one thick end” (MMR p.12). (下線筆者) (PR では “club” を太字にし脚注をつけている。OBW の巻末の語彙リストには “club” は載っていない)。“club” 自体は基本単語であっても、棍棒という意味ではおそらくなじみがないため、この補足は自然でありつつ良いサポートとなっている。

4.2 バックの焦点化

『野生の呼び声』は三人称で語られるが、その視点は、全知に近い人間の視点と主人公バックのものが入り混じっている。犬たちが完全に擬人化

され人間のことばを話すというわけではないが、折に触れてバックが（ときには他の犬も）焦点化され、犬の気持ちや思考、犬から見た出来事が語られるところは、本作の特徴であり魅力の一つだと言える⁽⁵⁾。

前節で取り上げた「棍棒と牙の掟」のエピソード内に、バックが生まれて初めて棍棒で殴られる場面があるが、MMR ではこの経験を、バックの視点から次のように記述している。“Something hit his body hard and he fell on his back. He had never been hit by a club and he did not understand” (MMR p.13). 原作でも引用部にあたる箇所最初の部分は“he received a shock that checked his body …” (p.11) (彼は突進を食い止める衝撃を受けた) と、バックの視点で語られているが、MMR の “Something hit his body hard” という記述は、やさしい表現ながら、初めてのことで何が起こったか理解できないバックの感覚をよく汲み取った書き換えであり、読者もバックの視点を共有できる。この部分を PR と OBW では、それぞれ男を主語にした客観的な文で表しており、やや味気ない。

PR But the man suddenly hit him very hard with the club. (p.3)

OBW Just before his teeth touched the skin, the fat man hit him with the club. (p.4)

次に紹介したいのは、北の地に到着した船から降りたバックが、生まれて初めて雪に接した場面である。少し長くなるため、代表として OBW の文章のみを引用する。

OBW At the first step Buck's feet went into something soft and white. He jumped back in surprise. The soft, white thing was also falling through the air, and it fell onto him. He tried to smell it, and then caught some on his tongue. It bit like fire, and then disappeared. He tried again and the same thing happened. People were watching him and laughing, and Buck felt ashamed, although he did not know why. It was his first snow. (p.8) (下線筆者)

雪を知らないバックにとって、足が触れたそれは「何かやわらかくて白いもの」である。その不思議な白いものは空からも舞ってきて、舌に触れると「火のように刺し」、そして「消えてしまった」。この描写には雪を通常と違ったふうに認識させてくれる異化効果がある。読者はバックの感覚を想像で追体験し、これが雪であることを推測しつつ読み進め、人間の視点に移った最後の一文の最終語で、やっぱり、と納得するだろう。この部分は原作でも MMR でもほぼ同様の記述である。一方 PR では、この部分はバックの視点からではなく、“Buck walked on snow for the first time in his life” (PR p.5) という無味乾燥な一文で処理されている。作品の本筋とはあまり関係のない部分ではあるが、全体を通してこういった細部があるかないかが、作品のおもしろさに影響を及ぼすと言えるのではないだろうか。

『野生の呼び声』では、三人称の語りを保ったまま焦点が頻繁にかつさりげなく移動するのだが、バックの思考が自由間接言説を用いてかなり直接的に書かれる特徴的な箇所も数か所ある。たとえば、作品の冒頭近く、盗まれたバックが次々と知らない人の手を渡りロープで縛られたり木箱に閉じ込められたりした際に、バックの疑問は自由間接言説で次のように述べられる。“What did they want with him, these strange men? Why were they keeping him pent up in this narrow crate?” (p.9) (この見知らぬ男たちは、自分をどうしようというのか。どうしてこんな狭い木箱に閉じ込めたりするのか)。こういった記述法はバックの不安や疑問をわかりやすく伝えてくれる。OBW と MMR でもそれぞれ原作に近い形でバックの心情を記載しているが (OBW p.3, MMR p.12)、PR ではこの辺りは手短かに出来事のみが記されており、バックの気持ちに読者が触れることはない。

別の箇所は、寒くて眠れないバックが他の犬たちはどこで眠っているのか疑問に思い、しばらくして雪の穴の中にいる仲間を見つけたシーンである。

原作 Were they in the tent? No, that could not be, else he would not have been driven out. Then where could they possibly be?

… So that was the way they did it, eh? (p.18) (テントの中にいるのだろうか。いや、それはありえない、だったら自分だって追い出されなかったはずだ。ではいったいどこへどこにいるのか。…なるほど、こうやるのか。)

このシーンにあたる部分の各 GR の記述は以下のとおりである。

MMR Where were the other dogs from the sled team? Had they found someplace warm? (p.19) … So that was how they did it! (p.20)

OBW Where was he going to sleep? … So that was what you had to do. (pp.10-11)

PR He looked for the other dogs, but he couldn't see them anywhere! … Then Buck understood. (pp.10-11)

MMR と OBW は、オリジナルの該当部分すべてではないものの、それぞれ難しくない表現で自由間接言説を使用し、バックの思考が伝わってくる。PR はほぼ場面を説明する平叙文だが、“but he couldn't see them anywhere!” の部分に感嘆符をつけることで、バックの視点になっているとも言えそうだ。こういった特徴的な部分は GR でもできるだけ活かすと、めりはりがでてくる。自由間接言説が学習者にとって難しければ、“Where are they?” のように直接言説を使用してもよいのではないだろうか。

全体的に見ると、バックの焦点化は、MMR > OBW > PR の順で活かされている。

4.3 臨場感のある描写と想像させる記述

原作と GR で最もはっきりと差が出るのが、詳細な描写の有無であろう。縮約するにあたってある程度の省略は避けることができないが、そのことによって臨場感が失われ、平板な印象になってしまうことも少なくない。一方で、あえてすべてを詳しく説明せず、読み手に想像させる手法がとられる場合もある。この場合、GR ではどう対応しているだろうか。本節では、この2つのタイプ

の描写を含む箇所として、デイクという名の犬が衰弱のため橇から外される場面を取り上げる。

郵便郵送隊に引き取られた犬たちは、重い橇を引く重労働が続き、疲弊しきっていた。とうとうデイクが苦痛の悲鳴をあげたり何度も転んだりするようになってしまい、橇を引かずに自由に歩けるようになると引き革から外される。しかしそれは、橇を引くことが生きがいであるデイクにとって、耐え難いことだったのである。原作では、デイクの悲痛な鳴き声や、自分の位置にあてがわれたソルレクスに噛みついたり体当たりする様子、ふらふらになりながらのたうつように歩きつつ橇についてこようとする姿などが詳細にやや感傷的に描かれる。デイクが仕事一筋で、普段何ごとにも動じない犬であることを読者は知っているだけに、このシーンは胸を突き、おそらく作品全体の中で一番の泣き所である。

ところが GR の中でも特に OBW のこの場面は、訴えかけてくるものがほとんどない。それは単に語彙レベルや簡潔さのみが原因というわけではなさそうである。その原因を検討するために、該当シーンの前半部分を以下に引用し、デイクの行動の視覚情報、聴覚情報、行動を修飾する部分、感情や痛みなどデイク視点に関わるものにそれぞれ異なる印を付した(視覚情報: 下線、聴覚情報: 波線、行動を修飾する部分: 二重下線、デイク視点: 囲み)。原作は引用が長くなりすぎるため、該当表現のみを書き出した。

原作 resented(憤慨した), grunting and growling (鼻を鳴らし、うなり), whimpering, broken-heartedly(胸が張り裂けたように哀れっぽい鳴き声を出し), For the pride of trace and trail was his(橇を引いて走ることが彼のプライドなので), could not bear, floundered (もがいた), attacking, rushing (突進して), trying to thrust (押しやろうとして), striving to leap, whining and yelping and crying with grief and pain(悲しみと痛みでくんくんきゅんきゅんと鳴き声を上げ), continued to flounder, exhausted, fell, and lay, howling lugubriously(痛ましく悲しげに遠吠えして),

With the last remnant of his strength (最後の力をふりしぼり), managed to stagger along (なんとか千鳥足で歩いた), floundered, stood, had bitten through (噛み切った), was standing … in the proper place (本来の場所に), pleaded with his eyes to remain there (そこに残りたいと目で訴えた) (pp.43-44)

OBW But Dave did not want to stop working. He hated to see another dog doing his work, so he ran along beside the sledge, trying to push Sol-leks, out of his place. When the sledge made its next stop, Dave bit through Sol-lek's harness and pushed him away. Then he stood there, in his old place in front of the sledge, waiting for his harness and the order to start pulling. (p.29)

原作では鳴き声などの聴覚情報がかなり多いが、OBW には聴覚情報はまったくないことがわかる。また状況や行動をより具体的に説明する修飾部もない。最初の方にデイブの気持ちを表すような表現が少し見られるが、視覚からわかる行動を淡々と記している部分がほとんどであることがわかる。

PR の該当箇所と同様の印をつけたのが以下である。

PR He [The Scottish man] stopped the sledge and took him out of his harness … but this made the dog angry. Dave was in a lot of pain, but he had a job. It was his work, and Dave hated to see another dog in his harness. The sledge started to move again, and Dave ran next to the other dogs. Running was very difficult in the thick snow. He cried and barked with pain.

He was also very weak and he fell down in the snow. He howled sadly, and started to walk slowly behind the sledge … He

walked slowly and carefully to the sledge. He stopped next to Sol-leks and didn't move away. (p.28)

PR では視覚情報に加えて、聴覚情報、修飾部、デイブ視点すべてがある。語彙のレベルが低くても、さまざまな種類の具体的な情報を入れることで、デイブの抵抗の悲痛さを OBW よりも鮮明に伝えることができていると言えよう。

次の日、ほとんど動くことができなくなったデイブは郵送隊から置き去りにされ、射殺される。小古間 (2017) が指摘するように、原作のこの場面では、他の犬たちが目にした事実のみが淡々と提示され、銃殺される直接的な描写はない。

原作 Here the train was halted. The Scotch half-breed slowly retraced his steps to the camp they had left. The men ceased talking. A revolver-shot rang out. The man came back hurriedly. The whips snapped, the bells tinkled merrily, the sleds churned along the trail; but Buck knew, and every dog knew, what had taken place behind the belt of river trees. (pp.44-45) (下線筆者)

デイブの銃殺を目撃しなくても、飼い主であった男が「後にしてきた野営地」に戻り「拳銃の音が鳴り響いた」ことから、バックも他の犬たちも何が起こったかを悟っている。そして犬たち同様にテキストの読み手も、この記述からデイブの身に起きたことを認識する。男が「ゆっくりと」野営地に引き返し、「足早に」橇に戻ってきた際の心境を推測することもできるし、他の男たちがおしゃべりを止めたことから、彼らにはこれから何が起こるのかわかっていたことも判断できる。銃殺シーンや男の心境が描かれないうえに、読者は積極的に想像力を働かせるのである。

しかし PR では、このシーンの描写はやや冗長で親切すぎるようだ。まず、橇を止めたときの男の心の声が、以下のような直接言説で書かれている。“I have to help Dave … . He'll die slowly in the cold snow, and I don't want that. He was a

good dog” (PR p.29). また、男が向かったのは「後にしてきた野営地」にではなく、「デイクのところ」と明示されている。「バックたちは理解した」という表現のあとには、“They understood the sound of the gun. And now Dave had no more pain” (p.29) という原作にはない記述が加えられている。

MMR は原作とほぼ同様の情報量で、OBW では “Then he stopped, took his gun, and walked back” (p.29) と、男が銃を手を取ったことが視覚情報としてはっきりと書かれている。

Uozumi (2011) は、GR と英語ネイティブの子ども向け読み物との比較において、GR はもっと読み手の想像力に頼ることで、よりおもしろく魅力的になりうると論じている。すべてを直接的に書いてしまうのではなく想像や解釈の余地を残すことで、読みの行為が双方向的になり、読者を作品に引き付けることができるという。同様なことがデイクの銃殺シーンにおいても言えるのではないか。どの GR も、「男はデイクを拳銃で撃った」とは書いていない分、原作の選択を尊重しているとは言えるが、読者の想像力を喚起する程度は、三者三様である。

4.4 予告によるサスペンス効果

『野生の呼び声』では、ある出来事をあらかじめ予告することで、サスペンスの効果を持たせるというパターンが多用されている。予想外の出来事にあっと驚かせるのではなく、何度か予告することでハラハラさせたり、どのようにそれが起こるのかを想像させたりして、読者の注意を引き付けるのである。たとえばバックがリーダー犬であったスピッツと生死をかけて戦うことになるのは、地の文、飼い主のせりふ、バックの意思や行動などによって繰り返し予告されている。同様に氷が割れて 3 人のアメリカ人たちが橇や犬ごと水中に沈むというショッキングな出来事も、彼らの愚かさ、氷の薄さに対する警告やバックの抵抗など、事前にしっかり伏線が張られている。

しかし予告は物語の必須要素ではないため、特に複数回にわたってなされる場合、縮約版では省略されがちである。本節では犬たちの食糧不足についての予告に着目し、予告の仕方とそれが読者

の心に引き起こすであろう心情について、オリジナルと各 GR を比較する。

まずは原作の流れを確認しよう。バックたちは重労働が続き疲弊しきっているタイミングで、北の地の知識がまったくない 3 人のアメリカ人に引き取られる。彼らは大量の荷物を当初の 6 匹だけでは運ばせられなかったこともあり、周囲のアドバイスにより犬を追加購入し合計 14 匹の橇犬を所持することになる。しかし続く以下の記述——“… there was a reason why fourteen dogs should not drag one sled, and that was that one sled could not carry the food for fourteen dogs. But Charles and Hal did not know this.” (p.51) (北極地方の旅にあって、14 匹の犬がひとつの橇を引くべきではない理由はちゃんとある。すなわちそれは、ひとつの橇では 14 匹の食料を運ばはしないという事実である。だがチャールズとハルはそのことを知らなかった)——は、今後の犬たちの飢えの苦しみを予想させ、読者を暗澹たる気持ちにさせる。少し先には、3 人がだらしがなく学習能力もない様子や、日々短い距離しか進むことができなかったことが語られた後、犬の食料の算出基準とした走行距離の半分以上を移動できた日は 1 日もなかったとの記述がある。次の段落の冒頭では、“It was inevitable that they should go short on dog-food.” (p.52) (犬の食料が足りなくなるのは目に見えていた) というはっきりした予告があり、読者は不安を募らせる。この段落では、男たちは速く橇を引かせるために、女は犬たちを気の毒に思い、それぞれが必要以上に餌を与えることで、食糧不足が始まる日を一層早めてしまったことが書かれている。ハラハラした気持ちが最高潮に高められたところで、次の段落の冒頭、“Then came the underfeeding.” (p.52) (そして、ついに食糧不足がやってきた) という短い一文が強いインパクトとともに読み手を襲うのである。次の段落は、“The first to go was Dub.” (p.52) (まず犠牲になったのはダブだった) と、またも短く強烈な一文で始まる。この文は実際に犬が亡くなったことを伝えると同時に、“the first” という表現を使うことで、他の犬たちも犠牲になったことの予告にもなっている。犬たちの苦しみの描写そのものではなく、いずれ惨事が起こることを

知らせた上でじわじわとそこに至るまでのプロセスが、読み手の心情に大きく作用するのである。

GR ではこの流れはどうなっているだろうか。MMR と OBW はこの部分の扱いが途中までよく似ている。まず、14 匹分の餌を一台の橇には乗せられないという最初の予告については、多少簡潔になっているものの、MMR と OBW とともにほぼ同様の記述がある。三人の無能さを示した段落において、MMR と OBW でも走行距離の短さは触れられているが、食料の算出基準とした距離にまったく達していなかった点については割愛されている。そのため読者は、走行距離の少なさを彼らの無能さの例として読み、餌が不足するであろうことと結び付けて考えない可能性が高い。餌が足りないにも関わらず必要以上に与えて食糧不足の開始を一層早めてしまったことにも両 GR は触れており、読者をハラハラさせる効果を一定以上保っていると言えるだろう。MMR では、その後の段落冒頭の効果的な二文を、それぞれ少しやさしく言い換えつつ活かしており(“Now the underfeeding began” (MMR p.39). “The first to die was Dub” (MMR p.39).)、原作に近い衝撃を読み手に与えるものと考えられる。

OBW では、与える餌を減らし始めたことは書かれているが、段落冒頭の「ついに食糧不足がやってきた」「最初に犠牲になったのはダブだった」にあたる文はなく、衝撃の度合いがやや低くなっている。

餌の不足に関する予告をまったくしていないのが PR である。PR では、食糧不足と犬の死が、以下のようにいきなり一続きに述べられる。“They [Three Americans] didn’t know about dogs, so they didn’t bring much food for them. The dogs began to die because they were tired, weak, and very hungry. In one week, six dogs died, and the other dogs were almost dead” (p.35). 唐突過ぎて、また具体性がないせいで、心に響かず、犬の死が胸に迫ってくることがない。複数の犬が食糧不足によって死んだという内容は同じでも、原作とはまったく違う読書体験となってしまうことがわかるだろう。

本節の最後に、バックの野生化の予告についても簡単に触れておきたい。最終的にバックは野生

に戻り狼の群れとともに暮らすことになるが、本作では先祖返りの予兆ともいえる描写も繰り返しながらされている。これに関しては、結末の説得力に貢献する働きもあると考えられる。野生への憧れや先祖とのつながりの描写は長くて難解でもあり、縮約版では非常に扱いにくい部分であるが、野生化の先触れについても最も丁寧に扱っているのが MMR である。

4.5 原作の尊重とわかりやすさ

本節では原作の理解と尊重という観点から、特に PR と MMR の特徴的な側面を紹介する。

PR は記述を省略したり簡潔にまとめる傾向がある一方で、ダイブの銃殺シーンでも見られたように、原作にないせりふや会話を加えることが少なくない。この手法は、場面に臨場感を生んだり、状況をわかりやすくする働きを持ちうるだろう。しかし実際に加えられたせりふ等を見ると、原作と内容が変わってしまったり、場面の雰囲気や人物設定に合っていないことが多々ある。

たとえば、飼い主ソーントンを殴った男にバックが大怪我をさせた酒場のシーンでは、原作にないせりふが複数加えられている。これは最後の主人となったソーントンに対して、いかにバックが強い愛情を抱いていたかを示すエピソードである。ある男が新参者に喧嘩を売ろうとしているところにソーントンが割って入ったことがきっかけで事件は起こるのだが、PR では、喧嘩を仲裁しようとする際のソーントンの思考が直接言説の形で書かれている。“‘Oh, no, there’s going to be a fight,’ he thought. ‘And this won’t be a good fight, because Barton is bigger than that other man. I’ll have to do something’” (PR p.42). ここでソーントンは二人の体格の差を根拠に心配しているが、原作にはそもそも体格に関する記述自体がなく、PR がなぜこのような設定を加えたのかは謎である。

また原作では、医者が怪我人の出血具合を確認している間にも、うろうろしたり、激しくうなったり、隙あらば男に襲い掛かろうとしていたというバックの様子を描いて彼の怒りを伝えている

が、PR はバックの様子には言及せず、文脈上重要だとは思われない医者へのせりふ “He’s got a very bad cut, but he’s going to live.” (PR p.42) を加えている。

さらに、バックの処遇についてその場で話し合いが持たれ、バックは無罪放免となったことが言及されるが、PR ではこの部分がせりふを伴った「場面」となり、“Yes, but Buck’s dangerous. He almost kill the man! We’ll have to kill him.” (PR p.42) などといった原作にはない反対者の意見なども書かれている。通常は、原作で場面として描かれている部分が GR では要約になってしまうことが多いが、ここでは逆の現象が起きている。しかしエピソードの主旨からすると、膨らませる場所がずれているのではないか。このように PR は、場面の主旨や作品全体を十分に考慮せずに不用意に追加をしたり変更したりしがちであり、そのためにニュアンスが変わってしまうことに無頓着であるように思われる。

加えて PR のこのシーンで気になるのは、俗語として使用されている “black” という形容詞を、そのまま使用していることである。ソーントンに殴った男は、原作において “‘Black Burton’, a man evil-tempered and malicious” (p.64) (「ブラック」・パートンなる性悪なやくざ者) と紹介されている。ここでの “black” は「悪意がある」「機嫌が悪い」といった意味で使われており、そのため原作でも black が引用符で強調され、さらに “evil-tempered and malicious” と補足されている。しかし PR では、学習者にはまず理解できないであろう “black” をそのまま使用し、補足の部分は削除してしまっており、単純に “‘Black’ Barton” (PR p.42) としている。読者はこの black を黒人の意味でとってしまうだろう。ちなみに OBW は “A man called Burton” (p.42)、MMR は “a bad-tempered man called Burton” (p.46) という表現を採用している。

せりふ等の付け加え以外にも、PR には、細部への配慮が欠けていると感じさせる箇所が散見される。氷が薄いのは激流のせいでは実際は寒波が来ているのに、暖かくなったため氷が薄いとしたり、犬の死への言及を省略したため亡くなった犬と残った犬の数が合計と合っていないかったり、マイ

ルとキロメートルの換算を誤ったのか、好条件のため非常に長い距離を進めたことを伝えつつ短い距離が書かれていたり (40 miles なので約 65 km になるはずが 20 km と記載) といった、ミスと考えてもよいような部分もある。このように作品内でも整合性や一貫性が保たれていないと、読み手の理解も曖昧にならざるを得ないだろう。

原作への理解と敬意が感じられるという点で対照的なのが MMR である。先行研究では MMR は思いきった書き換えをする傾向が指摘されているが、『野生の呼び声』の MMR 版は、かなり原作に忠実にほとんどの内容を取り入れている。やさしく表現を変え適度に簡潔にしつつも、内容や印象を変えずに非常に上手に要約している。原作の特徴的な箇所や重要な部分はできるだけ活かし、ちょっとした補足でわかりやすくする点においても優れている。以下に一例を示してみよう。

原作 The Thirty Mile River was comparatively coated with ice, and they covered in one day going out what had taken them ten days coming in. ... Across Marsh, Tagish, and Bennet (seventy miles of lakes), they flew so fast that the man whose turn it was to run towed behind the sled at the end of a rope. (pp.39-40) (サーティマイル川は氷もひとまず十分張っていて、往きには十日かかったところを戻りは一日で行けた。マーシュ、タギシュ、ベネット、と 70 マイルにわたる湖の連なりもまたたく間に駆け抜け、走る番の男は橇のうしろに繋いだ縄につかまって引いてもらう役目になった。) (下線部筆者)

MMR The run along the Thirty Mile River, which had taken them ten days coming in to Dawson, took them just a day going out. Across more than a hundred kilometers, they flew so fast that the men could not run with the sled and were pulled behind it at the end of a rope. (p.31) (下線部筆者)

原作の最初の文の後半 (下線部) は構文が複雑で

難しい。MMR では構文を変えることで難度を少し下げたうえで、“to Dawson”という行き先を加えたり、“just”を加えて「たった1日」と短さを強調し、意味を取りやすくしている。MMR の第二文では、「人は橈と一緒に走れなかったため」(下線部)と、走る番の人が橈に引かれることになった理由を補足することで、状況を理解しやすくしている。

最後に、MMR のみが章の数を増やしているが、章の切れ目も納得のいく場所であり、わかりやすさに貢献していると感じられる変更となっている。

5. おわりに

本稿では、『野生の呼び声』の3つのGRを比較検討したが、それぞれの特徴は、先行研究で指摘されている傾向とは異なるものであった。簡単にまとめると以下ようになる。

PR： 場面や英文を省略・簡略化しすぎているために、状況がわかりにくかったり、十分に伝わらない部分が少なくない。その一方で、かなり詳しく書かれているシーンもある。原作にない記述、特に直接言説でせりふや登場人物の思考などを加える傾向があるが、前後関係や原作のニュアンス、人物設定と合っていない付け足しも目立つ。作品内で整合性に欠ける部分が複数ある。

OBW： 場面ごとの要約は概ね妥当だが、全体的に大きな特徴がなく、あらすじ的な部分が多めである。描写はやや具体性に欠け、残酷な描写はマイルドになっており、あまり感情に訴えてこない。文章自体は平易で自然でわかりやすいことが多い。意図が理解できない原作からの変更がいくつかある。

MMR： 原作に非常に忠実であり、ほとんどの内容を取り入れている。文章を簡潔にしつつもかなり具体的でわかりやすく、伝えている内容やイメージが原作に近い。原作の特徴的な箇所や大切な部分が上手く活かされており、読者への細やかな目配りを感じる補足も多い。GRでも原作の

魅力を十分に伝える良い作品になりうることを示す例となっている。

本研究では、同じプロットの作品であっても、表現の仕方によって、読者に与える印象やインパクト、そしてわかりやすさの度合いに大きな違いが生じることを具体的に検証してきた。平易化により生じた不明瞭な箇所や作品内の矛盾もいくつか確認されたが、これらは、一方では作品全体に対する理解や考慮の不足、他方では読み手に対する想像力と配慮の欠如が原因であると言える。言い換えると、優れたGRの条件は、作品と読み手の双方に十分な意識が向けられているということになるだろう。語彙レベルや総単語数に違いがあるため単純に優劣を比較することはできないが、MMRの『野生の呼び声』は、原作と読者双方への十分な目配りによって、さまざまな制約があるGRでも、生き生きとしてわかりやすい魅力的な作品に仕上がっている。

多読活動においては、教材の量だけでなく質も非常に重要である。作品のおもしろさとわかりやすさは、学習者のモチベーションに直結し、さらなる読書につながっていく。教員は質の高い本とそうでないものを把握し、学生たちに伝えるとともに、さまざまな形でフィードバックや評価を公にしていくことも必要であるだろう。

本研究の限界としては、主に内容に関するいくつかの側面を取り上げたため、網羅的な評価ではなく、検討できていない点も多々あることが挙げられる。また3つのバージョン以外の『野生の呼び声』のGRを吟味することができなかった。機会があれば、他のシリーズの優れた作品も積極的に紹介していきたい。

注

(1) 2022年4月に日本多読学会から発行された『多読図書YL・語数リスト』には、75のGRのシリーズが掲載されている。

(2) Pearson English Active Readers は、Penguin Readers の作品本文をそのまま利用して、書式・挿絵等を変更しさまざまなアクティビティをつけたシリーズである。Penguin Readers からはその後『野生の呼び声』の別バージョンも出されたため、混乱を避けるため、

本稿では Penguin Readers ではなく、Pearson English Active Readers とした。

(3) 情報は、古川 (編)『多読図書 YL/語数リスト』、作品の裏表紙、各出版社のパンフレット・ウェブサイトより。

(4) 原作の日本語訳には、柴田元幸訳『ジャック・ロンドン 犬物語』を使用させていただいたが、文脈に応じて変更した部分もある。

(5) 光文社新古典文庫版の訳者である深町眞理子は、本作が「適度に擬人化されて」いるため、「すらすら読めるし、翻訳も心地よく進めることができた」と述べている (p.237)。また小古間 (2017) は、本作には、抽象的論理思考をもつ観察者としての人間の視点と、単純な論理思考をもつ犬による、感情を排した冷徹な視線が存在していると論じている。

使用テキスト

London, J. (2009). *The call of the wild, white fang and other stories*. Oxford University Press. (柴田元幸訳『ジャック・ロンドン 犬物語』スイッチ・パブリッシング)

Bladon, R. (2011). *The call of the wild*. Macmillan Education.

Bullard, N. (2008). *The call of the wild*. Oxford University Press.

Iveson, T. (2007). *The call of the wild*. Pearson Education.

引用文献

Bassett, J. (2015). A series editor's view (1). In *Extensive reading into the classroom*. (pp.22-32). Oxford University Press.

Claridge, G. (2005). Simplification in graded readers: Measuring the authenticity of graded texts. *Reading in a Foreign Language*, 12 (2), 144-158.

Claridge, G. (2012). Graded readers: How the publishers make the grade. *Reading in a Foreign Language*, 24(1), 106-119.

Crossley, S. A., Louwerse, M. M., McCarthy, P. M., & McNamara, D. S. (2007). A linguistic analysis of simplified and authentic texts. *The Modern Language Journal*, 91(i), 15-30.

Day, R. R. & Bamford, J. (1998). *Extensive reading in the second language classroom*. Cambridge University Press.

Day, R. (2015). Extensive reading: the background. In *Extensive reading into the classroom*. (pp.10-21). Oxford University Press.

深町眞理子 (2007). 訳者あとがき『野生の呼び声』 (pp. 231-238). 光文社.

Goodman, K. & Freeman, D. (1993). What's simple in simplified language. In M. L. Tickoo (Ed.), *Simplification: Theory and application* (pp.69-81). Singapore: SEAMEO Regional Language Center.

Hill, D. R. (1997). Survey review: Graded readers. *ELT Journal*, 51 (1), 57-81.

小古間勘一 (2017).『野生の呼び声』を犬の物語 (動物の物語) として読む『New Perspective』205, 4-13.

Krashen, S.D. (2003). *Explorations in language acquisition and use*. Heinemann.

黛道子 (2007). Canterbury Ghost を 5 種類の GR で読みくらべてみる『多読多読マガジン』4, 31.

古川昭夫 (編) (2022).『多読図書 YL・語数リスト』日本多読学会.

Nii, A. (2016). A Comparative textual analysis of abridged *Jane Eyre* from the viewpoint of plot development and character description. *JERA Bulletin*, 9, 3-24.

佐藤和哉 (2012). 多読教材としての『ロビンソン・クルーソー』: Graded Readers のテキスト分析『日本女子大学紀要 文学部』62, 49-67.

魚住香子 (2009). Graded Readers で読む『フランケンシュタイン』——読み物としての簡約版『現代英語談話会論集』4, 1-27.

魚住香子 (2015). “The Speckled Band” における語りと描写——Graded Readers との比較を通して『現代英語談話会論集』10, 13-36.

Uozumi, K. (2011). Graded readers in representational language learning. *Kobe International University Review*, 81, 37-49.

Vincent, M (1986). Simple text and reading text. Part I: Some general issues. In Brumfit, C.J. & Carter, R.A. (Eds.) *Literature and language teaching*. (pp. 208-215). Oxford University Press.